

手塚治虫の遺伝子 －鉄腕アトム的心－

Osamu Tezuka's Gene

なかはら かぜ

分野：漫画論、漫画、アニメ史

キーワード：漫画家、アニメーション、想像力と感性、世界観

少年は走っていた。秋も深まり少年は積み重なった落葉を踏みしめながら用心深く走っていた。とくにお墓の並ぶ、お寺の裏道は滑りやすく危ないと身にしみて知っていたからだ。事実、一度自転車のまま転倒し2メートル近くある側溝にダイビングしそうになったこともあった。極めて慎重にお墓を抜けると、大通りにぶちあたる。5段ほどある小さな階段を上がり、その大通りで左右を確認する。国道2号線である。自動車の来ていないことを確認すると、少年は急いで大通りを横切り、商店街へと下った。国道2号線は新しく造られた道だが、商店街は古くからの山陽道としての町並みが残るいわゆる旧道である。子どもたちにとっては、むしろこちらの道が遊びのための重要なフィールドでもあったのだ。その商店街を駅に向かって西に真っ直ぐ100メートルあまり下ると、次に大きな橋が現れる。石造りの古い橋だ。橋を越えると、再び商店街の道は傾斜を増して下って行き、50メートルも走らないうちに、こじんまりとした書店の前にやっと到着する。少年にとっての目的地である。自分の家を出発して、おおよそ500メートルの距離を全速で走ってきたために、かなり少年の息は上がっていた。

「まるみ書店」この町では2件ある書店のひとつである。木造の昔ながらの店舗だが、きっと以前は書店とは違う店だったような気がする。書棚には小説などの厚めの本が並べてあるが、雑誌や漫画本などの読み物は、あたかも鮮魚店の魚のように平台の上で泳いでいた。それは子どもにも簡単に手に取って読

むことができました。はたきを持って立ち読みをたしなめる店員はひとりもいなかった。少年はその中から一冊のA4サイズのさほど厚くはないが、他の雑誌よりは明らかに目を見張る美しい彩色で印刷された本を、1秒とかからずに難なく見つけた。その表紙には大きくこう印刷されていた。

「鉄腕アトム」

それは少年の毎日の生活の中で、心の中の大部分を占めている決定的なタイトルであった。

その時、少年は重大なことに気がついた。「鉄腕アトム」という本を取り上げたときに、その両手に何もないということだ。なぜなら家を出るときに父親からもらった100円札を（当時はまだ100円は紙幣だった）しっかりとその右手に握りしめていたはずだからだ。もちろん、この本を買うためのお金で、それが忽然と手の中から消えているのだ。慌てて、すべてのポケットをまさぐってみたものの、どこにも100円札はなかった。少年はあまり賢くはないその頭をフル回転させて、100円札の行方を考えた。簡単に推理はできた。家を出るときにはあったものが、書店に着いたときには忽然と消えていた。その途中の道のどこかで落としてしまったのだ。少年は慎重に注意深く来た道を引き返した。秋深く落ち葉が舞い散る中、枯葉色の100円札を探すことは想像以上に困難であった。電柱の影、ゴミ箱の下、防火用水の裏、側溝の中、目を皿のようにして探すうちにどんどんと気持ちは哀しくなっていた。そのうち先ほどの国道2号線に上がる階段のすぐ下の家の前まで引き返してきた。ふと、玄関先をのぞき込むと、門から奥まったところにある玄関の横に、たくさんの枯葉が吹きだまりになって集まっているその中に、ほとんど注意してみないと分からないところに、もみくしゃになった100円札が風に舞っていた。少年はそっとその家の門から入ると、慎重に100円札を手にもとめ、また書店までの道をこんどはしっかりと握りしめて、ゆっくりと走った。

その日は漫画本「鉄腕アトム」の発売日、もらったお小遣いをうっかり落としてしまうほど、少年の心は高鳴り、興奮していたのだ。昭和の30年代後半の出来事である。モノクロテレビ、冷蔵庫が家にやってきて、余裕がある家に

は電機洗濯機があった。大人たちはがむしゃらに働き、新幹線開通、東京オリンピックなどのイベント毎に大きく日本が成長していった。しかし、子どもたちにとってそんなことはどうでも良かった。子どもたちの生活の中心には常に漫画があり、学校での話題も漫画のこと一色だった。友だちとの遊びも漫画をまねての「…ごっこ」が流行りであった。

しかし、漫画は「悪書」でもあった。漫画を知らない当時の大人たちにとってみれば、それは俗悪な低級な読み物であった。学校の先生やPTAからは「漫画を読むとバカになる」とまで非難された。しかしながら誰一人として漫画を読むことをやめなかったし、まわりにバカになった友だちもいなかった。世の中不思議である。

悪書執筆の張本人は「手塚治虫」という漫画家である。一方では「漫画の神様」とも呼ばれているのだから、これまた世の中不思議な話である。

有名な話に、かつて外国の記者が電車や喫茶店で大人であるサラリーマンたちが漫画を読んでいるのを見て不思議に思い(外国では漫画は子どもの読み物だと決まっているから)、その理由を日本人に尋ねたところ

「外国には手塚治虫がいないからだ」

と答えたという。言い得て妙である。手塚治虫を神様と呼んでいるのは漫画を読むのが好きの人たちであることも間違いないが、手塚治虫が漫画好きの子どもたちに影響を与え、その中から次世代の漫画家たちがたくさん登場してきたことも理由のひとつだ。だからこそ手塚治虫自身が、また手塚治虫の作品が、多くの分野の人たちに多大なるその遺伝子を伝えていったことが見逃せないのだ。

手塚治虫は1928年、昭和3年に大阪に生まれた。父方には医者や司法官などがおり、母方は陸軍中將などの家系であった。比較的裕福な子ども時代を過ごし、家においてディズニーなどのアニメを映写機で鑑賞していたと言われている。母親も当時としては珍しく漫画好きであったようで、家には数百冊の漫画本があったというから、手塚治虫の漫画家としての素養は母親からつながっているのかもしれない。手塚治虫が医学博士であることもよく知られてはいる

が、こちらは父方の影響下にあるようだ。医者と漫画家とどちらを自分の生涯の仕事として選ぶにあたって、母親の「あなたの好きなことをやりなさい」

という一言で迷わず漫画家を選んだところからすれば、やはり母親の影響が強かったことは間違いないと思われる。得てして、歴史的な偉業をおこなう人物は母親からの何かしらの影響を起爆剤に行動を起こしていることが多い。

手塚治虫の漫画家としての歩みについては多くの書籍で紹介されているし、別の機会に記することにしても、手塚治虫の生涯をとおして、その作品に大きな影を落としているのは、やはり戦争体験に他ならない。1945年に勤労働員されている時に体験した大阪大空襲が、手塚治虫にとってそれからのちの作品の、大きなテーマとして、すり込まれたように思われるのだ。その時の空襲体験は「紙の砦」という作品に描かれている。手塚治虫が目当たりに見た死屍累々とした戦争は、まぎれもなく生と死の狭間を分け隔てている「いのち」という重い現実であり、手塚治虫が生涯背負っていく十字架になったと推測するのである。

さて、少年はA4サイズの光文社発行のカップ・コミックス「鉄腕アトム」を大切に抱えて帰ると、食い入るようにそれを読んだ。その本には、帯のように本のまわりに鉄腕アトムのシールがふろくで付いていた。当時アトムシールと言えば、明治製菓のマープルチョコに封入されていたものと、カップ・コミックスについていたものだけだった。ただし、無版權物のあやしいものは駄菓子屋に多く出回ってはいたが。

鉄腕アトムは空想科学漫画である。1951年に手塚治虫によって描かれた人型ロボットが活躍する物語である。漫画のなかではアトムの誕生は2003年4月7日と設定されている。手塚治虫は50年後にはアトムのような万能ロボットが人間社会の中で共存している未来を想像していたのだろうか。2010年、まだアトムは生まれていない。しかし、少年は買ってきたばかりの鉄腕アトムを何度も読み返しながらか、自分が大人になったときにはきっと鉄腕アトムの世界は現実となると信じていた。

空想の世界を魅力的に描いたこと、そして未来のテクノロジーを先験的な視点で描いたことは手塚治虫の空想科学漫画の魅力のひとつではあるが、少年の鉄腕アトムが大好きな理由は他にもあった。お金を落としたことも気づかないほど必死に書店まで少年を走らせた鉄腕アトムの魅力は、実はアトムはヒーローではないということだ。

鉄腕アトムはスーパーロボットであり、大空を足から噴射するジェットで飛び、どんな難しい計算も1秒で処理することができ、一千倍の聴力、目はサーチライトになり、60カ国語を翻訳でき、善人か悪人かを見分ける能力を持ち、何と言っても力は十万馬力といった、七つのスーパーウルトラミラクル能力を持つてはいるが、スペックのみで判断できる単なる正義のヒーローではないということだ。その少年はその純粋な瞳でもって、鉄腕アトムという漫画の中にヒーロー像ではない、もっと大切なものをちゃんと見ていたのだ。

それは「心」である。

「なんだAIかあ」

と早とちりしないで頂きたい。手塚治虫がアトムに託したのは、勧善懲悪なヒーロー像ではなかった、心を持ったロボットを描きたかったのだと思う。鉄腕アトムが映画「AI」や「アイロボット」などの制作において、企画やアイデアに大きな影響を与えていることは事実であるし、アトムありきで生まれた、ロボットの心をテーマした作品がたくさんあることも疑う余地はない。

少年は鉄腕アトムの中に自分と同じ心を持ったロボット、いや同じ子どもとして、友だちのような親しみを感じていたのだ。

当時、子どもたちの間で流行っていたロボット漫画といえば、鉄腕アトムと漫画家の横山光輝による鉄人28号であった。このふたつのロボット漫画はまったく正反対のタイプのロボットが主人公であった。先に述べたようにアトムは心をもったAI搭載型ロボットだ。アトムは電子頭脳（当時はコンピューターという言葉すらまだなかった）で物事を考える。

余談だが、その電子頭脳は人間でいう心臓のあたりにはめ込まれていた。人型ロボットという発想から電子頭脳は頭の中、脳的位置にあると考えるのだ

が、手塚治虫は心臓の位置にレイアウトしている。鉄腕アトムの中のいくつかのストーリーの中には、アトムが簡単に頭を体から外す場面が見うけられるのだ。悪人ロボットから頭を壊される場合や、頭を約束のしるしとして身代わりに置いていくストーリーさえあった。

話をもとに戻そう。一方、鉄人28号は意志を持たない、単なるラジオコントロールされたロボットである。金田正太郎という少年が所有するリモコンで操縦されるだけのロボットである。つまりはそのリモコンを所有する人物によって、鉄人は良いロボットにも悪いロボットにもなりうるということだ。鉄人を操縦する人物の良心如何により鉄人の役割はいかようにも変化する。鉄腕アトムとは決定的に異なるところだ。鉄人は頭脳も心も持たない。だから鉄人の場合、主人公はむしろ金田正太郎ということになる。

また横道にそれるが、当時の子どもたちの遊びの中に「鉄腕アトムごっこ」と、「鉄人28号ごっこ」があった。ごっこであるからには、みんなそれらの漫画の登場人物になりきって遊ばなければならないのだが、何の役をやるかが問題となる。どの役が人気であるかを考えると、その理由がよくわかってくる。アトムの場合は、圧倒的に主役のアトムをやりたがる子どもたちが多。が、鉄人の場合、鉄人はまったく人気がない。アトムは自分の意志で行動できるキャラクターなので自由である。ところが、鉄人の場合は実に大変である。鉄人役の子どもは、金田正太郎役の子どもの言うことを絶対に聞かなければならない。これは大変な役である。

「校長室に行って、校長先生のハゲ頭を叩いてこい！」

と命令されれば、絶対服従なのである。故に鉄人ごっこの人気は金田正太郎に集まり、それ故に主役なのである。

このような遊びの中からも、ふたつのロボット漫画の違いは確実に見えてくる。そして繰り返すが、手塚治虫がアトムの電子頭脳を頭ではなく、胸に設定したことは「心」を重要なテーマにしていたことの表れだと思われるのだ。

漫画の主人公にはいろいろなタイプのキャラクターが存在する。ストーリー漫画、ギャグ漫画、少女漫画、劇画、ジャンルによってもSF、スポーツ、学

園ものと主人公は星の数ほどいるといっても過言ではない。しかし、どれほどいても究極大きく分類してしまうと2種類の主人公しかいないのである。先ほどから書いているように読者の叶わない夢を漫画の中で読者に代わって演じてくれたり実現してくれたりするヒーローたちが主人公である場合の漫画。それとは反対に、読者に極めて近い現実的な主人公たち。読者と同じように悩みを持ちながら、泣いたり笑ったりしながら、毎日をそれでも一生懸命に必死に生きている、とても我々に近い存在の主人公である場合がそれだ。まさにヒーローものに對比させれば、等身大の主人公、とでも言えるだろうか。

この少年が鉄腕アトムの超人的な活躍にワクワクしながら読んでいることも間違いではないが、少年がこの漫画を心から愛していたのは、実はこの等身大のアトムのせいだったのだ。事実、鉄腕アトムは人間のように小学校に通っているのだから。

鉄腕アトムという漫画を読んでいくと、この少年の小学生である日常と共通する出来事や境遇といったものがオーバーラップしてくる。鉄腕アトムは少年の心に共鳴する同じ「心」を持った漫画だったのである。

少年は鉄腕アトムのストーリーは、どれもすべて好きではあったが、中でも何編かのお気に入りの作品があった。中には子どもには少し難しいのではないかと思われる作品もあるが、子供心には難解というよりも不思議な世界観としてそれは映っていた。そして、その不思議さは、やがて子どもから大人へと成長していく過程で社会性が養われてくると、徐々に理解できてくるのである。鉄腕アトムのみならず、手塚治虫の漫画には、そのように読み関わる年代によって、印象が変わっていく作品が少なくはない。

少年の好きな鉄腕アトムのストーリーのひとつに「キリストの目」という作品がある。少年にとってキリストが何なのか、誰なのかはまったくわからなかった。ただ十字架に掛けられた痩せた髭面の男の絵は以前どこかで見た記憶はあった。それがどこだったのかを思い出せるほどのそれは確かな記憶でもなかった。しかし「キリストの目」は、なぜかいつまでもその少年の心に残るストーリーであった。

「キリストの目」は1959年1月号に光文社発行の月刊漫画雑誌「少年」にふろくとして同梱されていた漫画だ。掲載当時のタイトルは「七つの影法師」であったが、単行本になったときに「キリストの目」と改題された。26ページの短編である。

ストーリーはある嵐の夜に、とある教会へ7人の悪人たちが押し入ってくる。それぞれに顔を隠し大きなトランクを持ち、秘密の悪事を企んでいるように見える。ひとりの顔を隠していた男の帽子が、嵐の風のせいで吹き飛ばされ、その顔を神父に見られてしまう。神父はその顔に見覚えがあった。神父は悪人たちに悪いことをしても神様は見ておいでだと告げる。悪人は、それなら布で十字架に掛けられたキリストの像の目に、目隠しをするようにと神父を促す。しっかりとキリスト像に目隠しをする神父。やがて、教会内で秘密の作業が繰り返り広げられる。香部屋へ押し込まれていた神父のもとに鐘つき係の男が窓から入ってくると、神父を助けようとするが、神父はそれより鐘楼へ登って、鐘をつき、みんなに知らせるようにと頼む。嵐の夜に鳴り響く教会の鐘の音！怒った悪人たちは神父を撃ち殺し逃走するのだ。

やがて田鷲警部とひげおやじ(手塚治虫の漫画には欠かせない重要なキャラクターたち)が捜査を開始するが、なかなか手掛かりが見つからない。鐘つきの男は口がきけず、字も書けないのだが、重要な証言を残す。その男が一枚の紙に描いた、上に7人の人のカタチ、下に6人の人のカタチ、である。7人でやって来て6人で出て行ったということであろうことは理解できた。そしてもう一つの手掛かりが見つかった。教会のキリストの像の目にひっかけ傷のように描かれた何かのマークである。神父が犯人の顔を見た直後、キリストの像に目隠しをする時に付けたマークであるようだ。

ひげおやじというキャラクターはアトムたちが通う小学校の先生でもあるが、事件を田鷲警部と共に解決する探偵役でもある。警察が踏み込めない場所などへも、その行動力で入り込んで行き事件の解決へのきっかけを提供する。ただし、その積極性があだとなり窮地に追い込まれることも多々あるのだが。そのひげおやじにとって気がかりは、7人から6人への消えた1人の不可思議、

そしてキリストの目のマークである。

ここまで7ページである。26ページの短編で事件の発生から7ページを使い、まだ主人公のアトムは登場していない。8ページ目にしてやっと、この事件にアトムが絡んでくる。

アトムは暴走してきた自動車を止める。

その自動車には胸を拳銃で撃たれた老人が乗っており、アトムにひとつのスーツケースをあずける。その際、老人はこのスーツケースが悪人の手に渡ると恐ろしい事件が起こるので、けっして怪しい人間には渡してはならないと話す。この事件をはやく両親に（アトムにはアトムより後に生まれた両親がいる。人間ではあり得ないことである）知らせようと、自分の家にスーツケースを持って帰ってくる。興奮気味に事件のことを報告しようとするアトムに対して、両親は真顔でそれを制するのだ。そして、いま学校の先生が来られて、アトムの成績が下がっていることを報告されたというのだ。

アトムの7つの力にどんなに難しい計算でも1秒で解いてしまうというのがあったのだが、ここではむしろ日々の事件解決のお手伝いに飛び回っているため、学校の勉強がおろそかになっているような展開となっている。まさに宿題もせず遊んでばかりいて、成績が下がった子どもが親に叱られてしまう、これを読んでいる少年の日常と同じなのである。

スーツケースを開けてみると、中にはロボットの手だけが入っている。そこへスーツケースの持ち主だという人物が現れる。もちろん先ほどの老人とは違う人物だ。両親は返しなさいとアトムに言うけれども、善悪を見分ける力のあるアトムは、この人たちは悪人だといってスーツケースを返さず追い返してしまう。自分たちの言うことを聞かなかったアトムを両親は「親の言うことが聞けないのなら、うちの子じゃない！」

と叱る。アトムは号泣するのである。ロボットであるけれどもアトムはよく泣くのである。

鉄腕アトムが「心」を持ったロボットであることの設定において、手塚治虫はアトムに泣くことを与えている。ロボット漫画では珍しい設定である。加え

て男の子として描かれてはいるものの、実に中性的でもあるのだ。女の子のような言葉も使えば、可愛く膝を揃えて座ったりもする。どちらかと言えば所作は女の子のようにも感じられるのである。手塚治虫は元気な男の子として設定するよりも、細かな感情表現をアトムに託す意図もあって、中性的な設定をしたとも想像できる。それも男の子の読者に人気がある理由のひとつでもあるかもしれない。だからこそ、ことある毎に泣くのである。そして多くの場合、それは両親に叱られたときであることから、当時の小学生を持つ家庭の様子とオーバーラップするのではないか。また、理不尽な死に直面したり、差別をうけた時にも泣く。これはまた後から取り上げることにする。

その夜、アトムは「うちの子じゃない」のならと、家出をしてしまうのだ。カバンひとつ持ち、夜の街へとひとり出て行くのだ。しかも歩いて。アトムは空を飛べるのである。しかし家出は派手に飛んでいくものではなく、とほとぼ歩いてそっと出て行くものらしい。これもなんとなく人間的ではないだろうか。

母親はアトムの家出を知って、慌てて街を探し、父親はアトムの持って帰ったスーツケースを、科学省に届けようとする。その途中父親は、悪人たちによって攻撃され壊され、スーツケースを奪われてしまう。科学省で直してもらい、アトムの言うことの方が正しかったと父親が後悔しても、アトムはすでに何処へいったのかわからない。

一方そのころ、ひげおやじは必死で謎と格闘していた。やがてキリストの目のマークがある企業のマークであることを突き止める。探偵心に火がついたひげおやじは、その企業の関係者の家に忍び込み、工場まで尾行する。自動車の屋根にしがみつき尾行するひげおやじの姿を、家出して歩いているアトムに偶然見られてしまうのだ。

工場へ到着すると、そこではじめて殺人光線を目から発する強力な殺人ロボットを開発していることを知る。教会で行われていたのは、そのロボットの組み立て分解実験だったのだ。ロボットはスーツケースに分解して運べるようになっていた。すべての謎が解明されはしたものの、ひげおやじは見つかってしまい殺人ロボットに殺されそうになってしまう。

ここからはお約束どおりに、アトムが駆けつけ、殺人ロボットと闘うのである。アトムにむかって殺人光線を発射しようとする殺人ロボット。その殺人光線は一瞬にして周囲の1000人を抹殺してしまう威力をもっているために、悪人たちはここで発射されては自分たちも巻き添えになると判断し、自分たちの武器で殺人ロボットを溶かしてしまうのだった。なんともお間抜けな悪人たちだ。

ひげおやじは、悪人のボス、そうあの夜に神父に顔を見られた男だが、キリストの目に刻まれていたマークが手掛かりとなって犯人が割り出せたことを知らせ、どんなに目隠しをしても、神の目はごまかせない、というセリフとともに悪人たちを連行して行く。その最後のページは1ページ全面を使い、背景に大きなキリストの十字架が描かれ、その前に悪人たちを連行するひげおやじが描かれている。だが最後の2ページには、闘っていたはずのアトムは描かれておらず、殺人光線を発する直前のページから忽然とアトムはいなくなっている。当時の少年漫画の範疇から考えると、なんとも不思議な、そして印象的なラストではなからうか。

カトリックの家の子どもではない限り(十字架にキリスト像が着いているのは、キリスト教でもカトリックに限られる)象徴としてのキリスト像は理解できないであろう。しかし、手塚治虫は別段宗教を語ろうとしたわけではない。ここで手塚治虫が描きたかった心とは。

この物語の中でキリストの目、神の目として描かれているものは、まさに「正しい心」の象徴であろう。正しいことを信じて行う心であるように思えてならない。つまり正義である。

事実、アトムは正しいことを行った。もし正しいと信じているのなら、悪人を見分ける力もあるわけだし、両親に叱られても、スーツケースを置いたまま家出などせず、自ら科学省へ届けるべきではなかったのか。そうすれば、そのロボットの腕がただものではなく危険な部品であることくらい、お茶の水博士によって解明されたであろう。ひげおやじの働きによって悪人たちの企業も判明し、事件はすぐにでも解決できたはずだ。

しかし、手塚治虫はそうはしなかった。10万馬力の正義の味方も両親には弱

いのである。両親もロボットではありながら、親としての子どもへの教育と仕上げへの気配りを、さりげなく描いてみせたのだ。

学校の成績の話でオブラートしてはあるものの、正義とわかっている危険と隣り合わせのアトムの行動に心配し、慎むように注意をする。親心である。

そこには逆に正しいことをしている心を理解してもらえず反発するアトムがいる。真っ直ぐな子供心である。

だからこそ、鉄腕アトムは読者にとって同じ目線の等身大のキャラクターなのである。アトムの両親も人間の家族と変わらない、一喜一憂する等身大の家族なのである。

手塚治虫が描こうとした「悪い心は正しい心に勝てない」という図式が、キリスト対悪人たちに現れている。

読者の少年は、象徴的なキリストから「正義は勝つ」といった少年漫画としての基本的展開に満足し、「小学生アトム」の境遇に自分たちの学校や家庭での立場をを重ね合わせて読んでいたのだと思う。そこに読者はアトムをより身近な友だちとして感じるわけだ。アトムはすでにロボットではなく人間の友だちとなっているのだ。

ところで実は、この物語はエンディングに関して、月刊漫画雑誌「少年」に掲載されたものとは異なっている。単行本では先に書いたようにキリストの十字架のシーンで終わっているが、掲載当時のエンディングを読むと、突如アトムがラストで消えてしまう謎も解明される。

それは、悪人を連れて行くひげおやじの次のコマが存在しており、ひげおやじは空を見上げ、飛んでいるアトムに対して、
「一緒に帰ろう」

と、声をかけるのである。それに応えてアトムは、
「家出したので二度とかえりません」

と、答えて、泣きながら飛んで行くカットで締めくくられている。

救われないラストであるようだが、むしろアトムが人間の子どもと変わらず、大人目線で小言を言う両親への、ささやかな反抗が感じられて潔くもある

と思う。

ただし、このエンディングでは、次回の物語に続けることが難しいと判断して、単行本では削除されたのかもしれない。なぜならば、連載当時であれば次のお話までは、読者は1ヶ月待たなければならないが、単行本の場合は次のページから新しいお話しが始まるからだ。いつの間にアトムは家に帰ったのだ、ということになりかねない。

さて、少年には鉄腕アトムの中に、もうひとつ好きな作品があった。なぜならその物語は少し哀しかったからだ。タイトルは「ロボット流し」といった。

手塚治虫の漫画には「いのち」という普遍的なテーマが流れている。代表作のいくつかは明確にそれを感じるストーリーとなっている。中でも「火の鳥」のシリーズ、「ブラック・ジャック」などが有名であるが、それらほど直接的ではなくても、「心」を描くことで、さりげなく「いのち」について手塚治虫はメッセージをストーリーに織り込んでいる。「いのち」というテーマは自らの戦争体験から生まれたものだと、生前に手塚治虫は語っているが、医学を学んでいるときに直面した生と死の問題にも起因しているとも言われる。

それは鉄腕アトムのストーリーにも見えてくる。だからこそ鉄腕アトムの多くの物語には、哀しい心の揺れや葛藤が描かれているのだ。

「ロボット流し」は1960年に発売された月刊漫画雑誌「少年」の夏休み大増刊号に掲載された作品だ。「キリストの目」から1年半たった頃の作品となる。

「ロボット流し」は次のようなセリフで始まる。

「毎年7月15日が近づくと精密機械局は急にいそがしくなります」

このストーリーの設定はお盆である。7月15日は旧暦のお盆であり、精密機械局が忙しくなるというのは、大量にロボットの注文が増えるということなのだ。そしてアトムの時代(21世紀)ではお盆とは呼ばずに「思い出の日」という祝日になっている。

15日になると注文をうけた家にロボットたちは、亡くなった人たちの容姿にそっくりメイクアップされ、歩いてやって来る(よみがえってくる)のである。たとえば亡くなったお爺ちゃんそっくりのロボットが帰ってきて、家族は

そのロボットを囲み懐かしく過ごすというわけだ。ただし、3日経つとロボットたちは、なごりをおしまれながら川へ流される。これを「ロボット流し」と呼んでいる。

子どもの頃は何気なく読んでいたこのストーリーも今となって読み返してみると、とても哀しい物語に思えてくる。

どうだろうか、死んでしまった大切な人がロボットになってお盆の3日間だけ家にもどってくる。映画「黄泉がえり」のロボット版といったところだが、果たして家族は幸せに感じるだろうか。現実としてロボットはあくまでもロボットであるわけで、映画のように亡くなった人が蘇ってきたわけではない。つまりは、姿形や声などがそっくりであっても所詮偽物なのである。

家族は懐かしい思いに浸りながらも、偽物のロボットと3日間「家族ごっこ」をしなければならないのだ。家族を演じるのである。亡くなったお爺ちゃんやお婆ちゃんなら、それでも微笑ましくも感じられる。しかし、若くして死んでしまった自分たちの子どもだとしたら。よけいに哀しく、いつまでたっても子どもの死を認めることができなくなるのではないだろうか。もちろん希望者のみがロボットを注文するのであろうから、悲しみの癒えない家族はロボット流しなどしないと思うが。

物語に戻ろう。そんな折りに、アトムはひげおやじから声をかけられ、頼みを聞かされる。ひげおやじの言うことには、自分の友だちの家にお盆のロボットとなって訪問してほしいとのことだった。その家のいなくなった子どものジロウが、アトムにそっくりだというのだ。

ひげおやじの頼みを引き受けたアトムは、その家を訪れる。両親は心から歓迎してくれて、本当のジロウが好きだった食べ物などをたくさん用意して待っていてくれた。アトムに我が子のように接した。アトムが二階のジロウの部屋へ上がっていった後、両親はジロウにそっくりなアトムが消えていった子ども部屋を眺めながら、

「ジロウだと思ってかわいがってやりましょう」

「3日間だけなものな…」

そんな会話を交わす。

実に哀しいシーンである。

ところが、アトムがジロウの部屋に入っていくところから、物語は急展開していく。ほのほのとしたものの悲しくもある導入部分から、一転して空想科学漫画となるのだ。忘れてはいけない、これは少年漫画である。「ロボット流し」の展開だけでは、子どもを引きつけることは出来ない。キリストと同様に、お盆という設定も子どもにとってはさほど興味がないからである。

ジロウの部屋にはなんと時航機（タイムマシン）が置いてあったのだ。ジロウは天才少年であったらしい。そんな折、ジロウの両親の元へ借金取りがやって来る。ジロウがタイムマシンを制作するのに悪徳業者からお金を借りていたのだった。話は妙に現実味を帯びてくる。取りあえずはジロウに扮したアトムの機転によって、その場は借金取りを追い返すことができたものの、アトムは再びジロウの部屋に戻り、気になっていたタイムマシンを起動させてしまう。アトムが連れて行かれたところは、なんと20世紀の日本だ。

多分、この漫画が手塚治虫によって描かれた1960年当時がそのまま描かれているのだと思える。さりげなくその風景が垣間見られるのが楽しい。とくに、大学紛争で人間たちが争っているシーンを見て、アトムがあきれる場面が時代を反映しているように思われる。

20世紀を見学して、タイムマシンに戻ってきたアトムを待ちかまえていたのが、なんと死んだはずのジロウ本人だったのである。ジロウは行方不明になって死んでしまったと思われていたのだが、実はタイムマシンが勝手に21世紀に戻ってしまい、20世紀に置き去りにされてしまっていたのだ。

事情の分かったアトムはジロウとともにタイムマシンでもとの時代に戻ってくる。そこに待ちかまえていたのは、例の借金取りが仲間を集めて、二階の子ども部屋へ押し寄せてきたところだった。お金は必ず返すからというジロウの言葉も聞かずに、借金取りたちはタイムマシンを奪い取ろうとする。暴力的な借金取りにアトムは立ち向かい、偶然にタイムマシンの中に借金取りたちが投げ込まれた瞬間、そのスイッチが入ってしまい、借金取り共々タイムマ

シーンはどこかの時代へと消え去ってしまった。事の顛末をお茶の水博士たちに、報告するために飛び立っていったアトムを見送り、ジロウはひとり階段を降りて行く。そこには3日目となって別れを惜しみ悲しむ両親がいたのだった。ジロウはそっと自分の手を両親に見せながら、ボクはロボットなんかではなく血の通った人間だと証明する。最初は驚く両親だが、本物のジロウが帰ってきたことがわかると、心から喜ぶ両親であったのだ。

そして最後のコマは1ページの半分を使って、川を流れていく無数のロボットたちを乗せた船と、その中に、同じく船に乗ったアトムの後ろ姿が描かれている。

さて、物語としては、行方不明になった子どもが帰ってきたというハッピーエンドではあるはずなのに、実にももの悲しいエンディングとなっている。未来の灯籠流しといった風情である。生と死を直接描いているわけではないが、この作品の中には先に逝った人たちへのレクイエムを感じる。

少年の心に、このストーリーが残っていたのは、そんな亡くなった人を思いやる慈しみの心になにか感じるものがあつたからかもしれない。この作品はわずか14ページの短編である。よけいな伏線や派手なアクションシーンなどまったくない。強いて言えばタイムマシーンという子どもが好きそうな素材と、借金取りを追い返すアトムの活躍程度であろうか。それでいて、この作品が心に残るのは、人間とロボットが「力や能力」で協力共存しているということではなく、人間の「心の隙間を埋めるため」にロボットが、人間に協力しているところだと思うのだ。

前にも書いたように、ロボットは亡くなった人をそっくりに摸して制作され、注文された家に送り込まれてくる。見方を変えれば、人間の奢った心で勝手に造られ、お盆が終われば川に流され、精密機械局にもどされたのち初期化分解される存在だとも言える。果たしてそんなことで人の心が満足するのか、ロボットをそのような単なる道具としての扱いをして良いのだろうか。アトム自体が極めて優秀な電子頭脳をもったスーパーロボットであるだけに、なんとも使い捨てのようなお盆用ロボットは哀れに感じてしまう。手塚治虫はなぜそ

のような設定をこの作品でしたのだろうか。ロボットにも人間と変わらない心を、持たせようとしたのではなかったか。当然、そのような疑問は起きる。

手塚治虫は鉄腕アトムのシリーズの中だけでも、「アルプスの決闘」「ブラック・ルックス」「十字架島」「白いパイロット」「デッドクロス殿下」「ホットドッグ兵団」「ロボットランドの怪人」「ロボット宇宙艇」「青騎士」そして極めつけは名作とされている「史上最大のロボット」などで、ロボットにも心があり、人間同様に心の葛藤もあると描いている。また、ロボットとはいえども心を持つことで、人間としっかりとした信頼関係を築けるはずだとも提唱している。そのことをよく理解した上で鉄腕アトムを読んでいけば、人間もロボットもその存在を区別してはならないと見えてくる。

手塚治虫が経験した戦争は、人間が人間を殺傷するというあってはならないことが、正義（時には聖戦）という言葉にすり替えられ、当時の子供たちの心に刷り込まれた、都合良く歪められた道徳のひとつであった。その発端は人間の心の底に眠っている差別意識である。

鉄腕アトムの中には、人間がロボットを必要以上に差別される物語も描かれている。

まさに人間同士の差別意識をロボットに置きかえているように見えてならない。「ロボットが心を持っているとするならば、人間がロボットを差別視するのは人種差別と同じである」

そのような手塚治虫の声で、痛烈な批判を感じるのである。しかし、そのことを直接漫画として描くことは、たぶん当時の少年漫画では難しい挑戦であったのかもしれない。

そこで生まれてきたのが、読者の子どもたちと同じ等身大の主人公であり、ロボットという違うカテゴリーの「人種」が与えられたのだと推測するのだ。手塚治虫は一見冒険活劇のような空想科学漫画というロボットを主人公にした漫画を描いたが、表面的なスケーティング解釈では気づかない深層部分に、たいへん重くて重要なテーマを隠していたと考えざるを得ない。

このように見方を変えてみると、実は手塚治虫は鉄腕アトムの第一話から、

はっきりと読者である子どもたちにその重いテーマを投げかけている。

第一話をご存じの方もおられると思うが、天馬博士という天才科学者の一人息子である飛雄が、交通事故で死んでしまうところから始まる。あまりの悲しさに打ちひしがれた天馬博士は、21世紀の最高のテクノロジーでもって飛雄そっくりのロボットを造り上げるのだ。ロボットの飛雄はそんな天馬博士の心の隙間を埋めてくれるかのように思われた。しかし、そこには大きな落とし穴があったのである。ロボットの飛雄は何年経っても成長しなかったのである。ついには

「お前は飛雄ではない」

と、天馬博士はロボットの飛雄をサーカスに売ってしまうという物語だ。なんとも哀しい展開であろうか。

ロボットへ痛烈な差別する、アトムの子の親である天馬博士。そして売られていったサーカスでは、まるでロボットをお金を儲けの品物のようにあつかう座長が登場する。ところが、サーカス小屋のテントが事故で火事になったとき、アトムの機転で差別をうけていたロボットたちが全員協力して、人間の観客を助けるのだ。アトムも身を挺して悪徳座長を火事の中から救い出す。その功績がやがて認められ、心あるロボットは人間と同じであるというロボット保護法が承認されるという結末である。

では「ロボット流し」で手塚治虫はなぜあえてロボットを使い捨てのお盆のための道具のように描いたのだろうか。

手塚治虫は鉄腕アトムの中で人間同士が階級や差別を越えて、憎しみや恨みの連鎖を繰り返すことなく、心を開いて理解し合うことがもっとも大切なのだと訴えている。戦争批判や人種差別批判をオブラートして描いてきたように思われる。だからこそアトムをはじめ多くの登場するロボットたちに心を与えているのだ。

空想科学漫画、このジャンルの言葉の響きには一般的にはどんなイメージがあるだろうか。20世紀の子どもたちは50～60年後の未来にどんなイメージを描いていたのだろうか。手塚治虫は自らの漫画の中で、どんな未来を見せよう

としていたのだろうか。

平成元年に21世紀を見ることなく亡くなった手塚治虫は、今のこの世の中を予知していただろうか。現実として2010年に生きている我々は、子どもの頃にこのような今の21世紀を想像していただろうか。

科学は人々の暮らしを幸せにするためにあり、テクノロジーの発展は人々の夢を叶えてくれるものだと思っていた。しかし、現実にはそんな理想的な未来社会はおとずれてはいないし、未来科学は確かに便利な世の中を見せてくれてはいるが、それと引き替えにもっと大切なものを我々はどこかに、置き去りにしてきたのではなかろうか。

20世紀の漫画家やSF作家が描いた、目眩く甘美な未来とはほど遠い現実を我々は突きつけられている。未だに治まることを知らない戦争や内乱、宗教や人種差別。そして最悪の一途をたどる環境問題。実際、21世紀になり制作される未来を描いた様々な漫画や映画のなんと終末的なテーマの多いことか！人々は子どもの頃に描いた未来とは、まったく違ってしまった現実の「今」に落胆を隠しきれず、それは人間力の低下、経済の衰退などへと感染しつづけている。

手塚治虫はむしろこうなる未来を予感していたのではないか。光り輝く未来ではなく、科学の発展による合理主義への不安、テクノロジーという名の殻をまとって無気力が加速する人間たち、その中に深くうずくまってしまっている未来をだ。

「ロボット流し」は人間のために良かれと思われ行われている心温まるロボットたちのイベントのように見えて、そこにはおごり高ぶった人間たちの間違っただテクノロジーへの、手塚治虫の批判と警鐘があるのではなかろうか。あえてロボットに対して創造主であるという人間の、愚かな差別意識を描いてみせたのではなかろうか。

繰り返すが、手塚治虫はロボットを人間の友だちのように描き、読者の子どもたちから絶大なる共感を得た。鉄腕アトムは正義の味方ではあるが、子どもたちと同じ悩みや喜びを感じる等身大のキャラクターとして人気を博した。そのために手塚治虫はロボットにいのちとも言ふべき心を与えた。

そんな手塚治虫の遺伝子は確実に子どもたちの心の中にしっかりと根を張り、某車メーカーでは二足歩行ロボットを完成させた。開発に携わったのは、子どもの頃に鉄腕アトムを読み見て育った科学者たちだった。

いのちをテーマにした手塚治虫の遺伝子は医学を目指す子どもたちや若者たちにも強烈な印象を残し、多くの医者たちがブラック・ジャックを医学書と同じ書棚に並べ、自分にとってのバイブルだと豪語する。

少年に話を戻すことにする。少年は小学校へ行っている時も、友だちとの話題といえば手塚治虫の鉄腕アトムのことばかりだった。勉強もせずに、気がつけば教科書にアトムの漫画を描いていた。夢中になって描いていると、よく先生に見つかり、こっぴどく叱られた。その先生が教科書のほとんどのページに描かれたアトムを見て感心して少年に言った。

「へーえっ、アトムっているんな顔があるのね」

そう、少年があらためて自分の描いたアトムの顔をじっくりと見てみると、いろいろな表情のアトムがそこにいた。もちろん、漫画本やアニメで見て、記憶に残っていたそのアトムの顔を思い出しながら、教科書に書き写したものではあったが、確かに表情豊かなアトムがいた。怒ったり笑ったり、そしてもちろん泣き顔もあった。鉄腕アトムには確かに喜怒哀楽がはっきりとあるのだ。アトムはロボットなのになぜ感情があるの？自分でその答えを見つけるには、少年はもう少し大人にならなければならなかった。しかし、自分が鉄腕アトムが大好きで、息を切らしてまで書店へ駆け込んでいく理由は、ひっとしたらそこにあるのかもしれない、とぼんやりと感じていた。手塚治虫の遺伝子はすでにしっかりと、その少年の心に組み込まれていたのだ。

おわり
参考文献

- ※図説「鉄腕アトム」森晴路・著
河出書房新社
- ※手塚治虫漫画全集 講談社